



静かな勇氣

〈滋賀県〉高野 裕子 49歳
たかの ゆうこ

12年前の冬、ある病院で私の夫は最期の時を迎えようとしていました。まだ35歳。闘病の3年間、手術や抗がん剤治療を繰り返しながら、当時はまだ珍しかった病院内での「患者と家族の会」も立ち上げ、精一杯、病氣と闘ってきました。そして、よく笑う幼い2人の子どもたちと穏やかで幸せな日々を送っていました。

しかし、病は夫の体の自由を奪い、感覚を奪い、次第に意識をも奪っていきました。痩せた体は驚くほど脚がむくみ、私一人では抱えきれない状態になりました。

そんなある日、私は夫の着替えを手伝っていている看護師のUさんのお腹が大きくなっていることに気付きました。もともと早く気付いても良かったはずですが、日ごろからお腹をかばう様子も見せず、いつもキビキビと動き回る姿はとても妊婦さんには見えなかったのです。

遠慮がちにUさんに聞くと、やはり赤ちゃんがいるとのこと。すぐほかの看護師さんに代わってもらおうようお願いしました。が、Uさんは聞き入れてくれません。夫の体は

相当な重さです。夫の体を抱えたとき、ベッドの縁がUさんのお腹に当たりぐにゅつと食い込むのが見えて、思わず声が震えました。

「お願いだから誰かに代わってもらいましょう。彼はとても子どもを大切にします。もし彼が話せたら、きっと『やめて』って言うと思います。だからもうやめて、お願いだから……」

その時、必死で懇願する私にUさんは言いました。

「実は、私はあしたから産体に入ります。きょうが高野さんのお世話ができる……たぶん最後の日になると思います」

「最後の日」と言うUさんの顔がゆがみました。全ての意味を含んでいるのが分かりました。「私たちは今まで高野さんと奥さんのがんばりをずっと見せてもらっていました。諦めない明るいお二人を見ながら、今はどうしようもない現実がともつらいです」。その目は真っ赤で、今にもこぼれそうなほど涙が浮かんでいました。

「高野さんの姿を見ながら、この子が生まれる意味を私はとても感じさせてもらって

います。だから今日は私にやらせてください。絶対、無理はしませんから……」

その後、Uさんと私は一緒に泣きながら、笑いながら、そして夫とお腹の中の赤ちゃんに話し掛けながら、時間をかけて夫の着替えを終えました。

逝くことと生まれくること……。そして、それらに添って見守ることを私たちはそれぞれの立場で共有していたのでしよう。それは、途方もなく寂しくて、温かく優しい時間でした。

現在、私は「入院患者と家族のためのサポートハウス」を作ろうと奮闘しています。小さくてもいいのです。あのとときももらった優しい時間と静かな勇氣を同じ立場の誰かに届けたいと思っています。

あのとときの赤ちゃんは、きつともう12歳。あの日からずっと会いたいと思っています。忘れたことはありません。Uさん、もし会えたら抱きしめてもいいですか？

「あのとときは、協力してくれてありがとうね。あなたと、あなたのお母さんがくれた勇氣を、今でもうれしく覚えているのよ」